92
396

越後傳說四十七不思議解

92-396

題辭

伯爵 溝口直正閣下

文學博士 井上圓了先生

衆議院議員 大竹貫一先生

序文

衆議院議員 竹越與三郎先生

東京府視學 御園生金太郎先生

早稲田大學圖書館長 市嶋謙吉先生

朝倉亀三 寄贈本

中原育堂編

越後傳說

四十七不思議解

完

發行所

東京市本郷區元富士町二番地

磊磊堂

電話下谷一三六九番

徵

頭

蘭亭

良齋歌

目次

天下に不思議なし……一
七不思議の元祖……四
臭水……八
火の井戸……一三
八房梅……一七
三度栗……二〇
逆さ竹……二四
即身佛……二七
燃る土……三二
海鳴……三八
神樂……四一
白兎……四四
矢の根石……四五
鎌鼬……四七

蘭

良齋歌

目次

天下に不思議なし……一
七不思議の元祖……四
臭水……八
火の井戸……一三
八房梅……一七
三度栗……二〇
逆さ竹……二四
即身佛……二七
燃る土……三二
海鳴……三八
神樂……四一
白兎……四四
矢の根石……四五
鎌鼬……四七

貴著通讀　七不思議の御說明一々面白く拜見仕候御說明の如く從來は物理博物の學、開けさりしより不思議にあらざるものを不思議と命し一も不思議、二も不思議とし決して七不思議に止まらざるなり今や人文の進歩と共に昔日の不思議は復た今日の不思議にあらざるを知るに至るも世間猶ほ未た其理を了解せざるもの多し是等の人に貴著を一讀せしむるに至らば疑團氷釋するに相違無之、敎育上尠からざる稗益あるべしと存候右卑見を添へて貴著返璧仕候也

井上圓了

平島の川越名號（一名波切名號、帆立名號）……五〇
波題目……五五
簑虫簑火……五七
狐火……六〇
龍卷……六二
龍燈……六四
幽靈人魂……六六
恙虫……六九
燒鮒……七一
河童……七四
魚岩……七九
塩谷塩水……八二
臼清水……八四
新不思議……八五

我が北越の地、古來頗る奇怪の俗說を傳へ、所謂越後七不思議の名、普く人口に噜炙す。後人事を好む者、故らに附會妄誕の說を逞ふして益々其事を奇怪にし、不思議事項亦倍蓰して今や數十件の多きに達す。知らず其所謂奇なるもの果して奇乎、其所謂怪なるもの果して怪乎、抑も亦天地間所謂不思議なるもの存するありや否や。鄕人中原育堂氏多年敎育の事に從ひ、勤務の餘暇、越後不思議事項を研究し、頗る得る所あり。乃ち之を一書に編し科學上より觀察して一々原因結果を說明し、其の決して奇怪不思議にあらざるを立證し、以て俗說の妄を辨したり。其解說全部の當否は余未た之を詳にするに暇あらずと雖も、論斷一々據る所あり、記事亦頗る趣味に富む。其敎育上に稗益あるは勿論、世上迷信者流の蒙を啓くの効、蓋し鮮少にあらざるべし。書成るに及んで一言を卷首に辨ず。

明治四十一年晩春

大竹貫一識

拜啓過日は御來訪尊著御內示被下難有奉存候。是にて越後の七不思議が解釋せられ候のみならず、天下の不思議も解釋せられ候譯にて、敎育上に於ける効果不少事と存候。泰西にては科學を地方的現象に應用し、解說を試むるもの不少候へども、我國にては此類のもの不多、老兄之篤學、此處に着眼せられ候は、不禁敬服。所謂、文章盡大塊中來、花鳥都得意、案頭書潛心既得、聖賢亦可希と申す樣なるものか。謹んで寸楮を裁し御祝し申上候。稽首

三月二十五日

中原老兄　侍曹

竹越與三郎

中原君が、今度、越後傳說四十七不思議解といふ書物を著された。古來、越後の國に傳つて居る不思議談を、殘らず數へ擧げ、之を今日の學理から見て、決して、不思議でないと云ふ譯を、その一つ一つ毎に、悉しく、說いたものである。越後の不思議は七不思議と、大抵、相塲のきまつたものを、讀んで見ると、その數が七七四十九不思議近くもあるとは、なんと、不思議ではないか。だが、千年も百年もの昔に生れ出た七不思議なら、今までに、子や孫の數も殖える筈。して見れば、これに何の不思議はない。たゞ、あまり殖え過ぎて、どれが親元だか、子分だか、わからぬところだけは、何處までも不思議だ。

越後ばかりか、日本國中、あちらにも七不思議、こちらにも七不思議と、七不思議のあること、あること。どれが本家だか、分家だか知らぬが、何處の不思議も七不思議ときまつて居るのは不思

議ではないか。いや、何の七不思議、かんの七思議と、ありとあらゆる七不思議の數は、七七四十九不思議を、もう七つたぶつてまたぶつても、まだ足らぬほどもあらうが、その總本家は、蓋し、越後の七思議だらう。是かまづ親王の大七不思議、その外、數ある七不思議と云ふ七不思議は、その子七不思議か孫七不思議、云は、小七不思議、小々七不思議に過ぎまい。中原君が、逸早く、こゝに目をつけ、學理の光に照して、まづ、七不思議の親王を槍玉にあげたのは愉快だ。分家子分の小七不思議、小々七不思議は、十把一からげ、推して知るべしさ。だから、昔から言ひ傳への七不思議なんぞは少しも不思議でない。開け行く世の事々物々こそ不思議なのである、月日と進む學理學術の力こそ不思議なのである。

明治四十一年三月

御園生蘆江

拜啓御近著「越後傳說四十七不思議解」面白く拜見仕候わが越後の不思議に富めるや唯に七つのみに止まらざること小生も承知の事なりしが眞逆七乘に近き程とは存じもよらざりし所なり御研究の凡ならざるは先づ此一事にても知られ申候案ずるにかく不思議の傳說の夥しきは一面土地の古くして廣きことを立證すると同時に他面迷信の多きことをも表彰するものと申すべく取りも直さず其住民の無智蒙昧を白狀する者に候去れとも遠く且つ深く考ふれば天地は長へに不可思議なり神秘なり神秘なるが故に詩的あり俗に謂ふ言はぬが花あけ放してしまはぬ奥の院の扉の裡にこそ人生の味ひは籠るものとも申し得べくやわが越後の不可思議傳說も同じ道理にてそこに棄てがたき詩的趣味あるものと解すれば此御本尊を明るみへさらされ候貴著の骨折例の小生が骨董癖より申せば聊か恨めしからざるにもあらず候とは申ものゝ又退いて考へ候へば一たび學術の明鏡に照らされれば直ちに本体をあらはすやうなるテンプラじたての黃銅佛は到底將來の信仰を價ひせざるべくさすれば一日も早くツブシとなすかた却つて佛壇の大掃除と觀念致し深く貴著の勞を謝し申候併しながら天地は長へに不可思議なり人生一日も詩趣を缺くべからず小生は在來の不思議に比して更らに深遠玄妙なる詩的事實の早晩代はつて吾鄉國の盛飾とならんことを願はざるを得ず候すなはち著者に向つて深く謬信打破の御盡力を多とすると共に更に新信仰と新詩趣の建設にも力を致されんことを望む時下自玉所冀候頓首

三月　日　　早稻田大學圖書館に於て

中原育堂君　　市島謙吉

緒言

曾て余は泰西の科學が、未だ我國に輸入せられなかつた時代に、我國人はどんなことを不思議として怪しんで居つたかにつき、竊に探究をして見た。其結果、余輩の鄉國、越後の七不思議が、抑も我國七不思議の本家本元で、そして其の不思議の種類が、七つに止らず、四十以上もあり、實に我國不思議界のオーソリチーであると云ふ事を知つた。そこで暇を見てはチョイ〳〵之を取調べ、不思議が必ずしも不思議でなく、中には却つて國家の富源であることなどを、一々教育的科學的に解說し、一方には舊來の迷信を打破し、一方には新思想の養成を計らんことを試みて、甚だ不完全なから此の小册子を取纒め、同鄉の知友が奬むるまゝに、越後傳說四十七不思議界と銘打つて、敢て之を世に公にするに至たつ譯である。固より淺識菲才の身のホンの一通りの研

究に過ぎない。希くは江湖の識者、幸に本書の杜撰を咎めず、之に對する教示と材料とを惠與せられんことを。さらば編者は全きを將來に期して、訂正增補を怠らぬ考である。

尙本書の記事につき、種々の材料を與へられたる諸君に對し、玆に謹で謝意を表す。

明治四十一年五月

編者識

越後傳說

四十七不思議解

中原育堂編

天下に不思議なし

世が未だ開けず、學問が進歩しなかつた、昔の人は、天地間の有らゆる事物に對して、笑ふべき驚異の心を以て見たのです。即ち、雷鳴を開いては、昔の人は鬼が太鼓を鳴らすのだと思つて居ました。地震は地の中に大きな鯰が居て、それが動くものだと考へて居ました。雪は雲か千切れて落つるもの、風は怖ろしい鬼神の息、或は天狗が居るの、山男があつたの、人魂が飛んだの、幽靈が出たのと、昔の人は種々に不思議がり、驚き怖れて、遂には狐や狸や石や井戸などまで、飛んでもないものを神に祭り上げて、

禮拜をして居ました。

併し、今から見れば、是等は少しも不思議なことでも驚き怖るべきことでも何でもありません。即ち、雷は空中に起る電氣の作用、地震は地層收縮或は凹沒の結果、雪は水蒸氣が空中に凍つたもの、風は空氣の膨張に因つて起るものと云ふ位の事は、小學校の少年諸君が充分御承知でせう。

昔の人が是等の事を不思議がるのは、恰も、小供が自分の吐く息の白いのを見て、咽の中に火があるのかと驚いたのと同じことである。

よく〳〵根原を正して見れば、世の中に不思議と云ふものは一つもありません。皆夫れ〳〵の理由があるのです。

若し、世の中に不思議と云ふものがありとすれば、昔より今の方が、ずつと不思議が多いではありませんか。

何萬貫目の重いものを積んで、一時間に何十里も走る汽車汽船、針金一筋で百里も千里も先の者と話もし通信もする電信電話、是等のものこそ、昔の人が不思議がつた、天變地異などに、百倍千倍した不思議ではありませんか。

併し、今の人は少しも是等の不思議には驚きません。是は人智が進んだからです、學問が開けたからです。故に、今日から昔の人が不思議がつたものを見ると、不思議とするに足らないのみならず、却つて笑ふべきものが多くあります。

それで、茲に七不思議の本家本元、越後の七不思議の事を研究して、所謂七不思議が決して不思議でも何でもないのみならず、此の廣い世の中に一つとして怖いものも、不思議なものもないと云ふことを述べて見ませう。

七不思議の元祖

日本國中到る處に七不思議と云ふものがあります。地方々々で其の土地の特異なものを選んで七不思議を名けますが、恰も、近江八景だの、金澤八景だのと八景の名稱が諸國に多くあるが、原起は支那の洞庭湖の瀟湘の八景から出たやうに、是等の七不思議の元祖は、越後の七不思議であります。

所が、この本家本元の越後の七不思議も、其の種類が多くあつて、そして其れが書物に因り人に因つて各々名稱が違ふのであります。

今大概其の違つたものを列擧して見ますと

(一) 蒲原郡三條町在如法寺村燒風火
(二) 頸城郡能生名立四海波
(三) 頸城郡妙高山赤坊主八瀧

(イ)

(四) 蒲原郡新津村拇目木草生水
(五) 蒲原郡村松在河内墓坊塔
(六) 蒲原郡栃尾鹽谷鹽水
(七) 柿崎在米山腰燒石

それからまた

(ロ)

(一) 海鳴
(二) 塔鳴
(三) 簑虹
(四) 兎の毛色
(五) 矢の根石
(六) カマイタナ
(七) 妙法寺の火井戸

右の外親鸞上人の舊跡に就いて七不思議を立てるものもあり

ます。

(一)蒲原郡田上村の繋ぎ榧
(二)小島の八房梅、珠數掛櫻
(三)保田の三度栗
(四)鳥屋野の倒竹
(五)山田の燒鮒
(六)平島川越名號
(七)新潟淨光寺の倒竹

(ハ)

右の外、左の七不思議を立てるものあります。

(一)拇目木の火井
(二)草生水の油
(三)小島の八房梅
(四)保田の三度栗

(ニ)

(五)田上の繋ぎ榧
(六)鳥屋野の逆さ竹
(七)角田濱の波題目

(ホ)

(一)燃る水
(二)燃る土
(三)海鳴
(四)土鳴
(五)神樂
(六)白兎
(七)鎌鼬

(一)臭水
(二)火の井戸
(三)八房梅

(へ)
(四)三度栗
(五)逆さ竹
(六)即身佛
(七)燃る土

越後の七不思議は、其種類が殘らずで四十以上あるとのことですから、また此の外に說があるかも知れませんが、私の眼に觸れたのだけで是れ丈ありません。是を皆解說するは管々しひから、大體最後の(へ)の七不思議に因り、其他越後で唱へられる狐火、龍卷、龍燈、幽靈、人魂、恙虫、河童、魚岩、臼清水等數々の不思議に就て解釋を試みませう。

臭水

臭生水と書いて「くさうづ」とも讀ませます。『溫古の栞』と云ふ

本に之を案ずるに、燃ゆる水は今の臭水なるべきか、又は古志郡の山中比禮村の澤に井壺あり、常に清水涓々として湧出す。是より流水五十間以内にて、近く火を翳せば、忽ち水にうつり、焰々と燃上り、流水につれ暫時にして消ゆ、其の水質甘美にて飲用に供す。

又三島郡太和田村の山間に方六尺の溜水あり、常に湯の湧く如く泡立てり、火をかざせば忽ち燃上り、少時に消ゆる冷水にて敢て臭氣なし。

と、書いてあります。又一說には臭水は、越後國蒲原郡柄目木村の岩間より湧出する錆色を帶びたる泥水なり、すべて此の水を以て嗽ぐものは、口中の臭氣一切取り去るを得べし。

と云ふことを書いたものもあります。

兩説少し意味が異ふけれども、要するに前の者は今の石油でせう。そして後のやうな泉は少しく地中に鐵氣と硫黄氣とを含んで居る所では、何處からでも湧くもので、敢て不思議ではありません。不思議でないのみならず、越後の石油などは實に日本の富源であるのです。次に一寸現今の越後の石油事業の由來と景況とを説きませう。

越後の石油は、明治以前に於ても之を採收利用して居たものはないではなかつたが、明治六年に石坂周造氏が始めて石油會社を起し、東山浦瀬と云ふ所に數個所の手掘を行つて見たのが、抑も越後石油事業の嚆矢であります。處が不幸にも關係者は、何れも多少の損害をして中止したので、石油事業と云へば山師的の事業として、越後の人は畏縮して終ひ、其れが爲

め發達の機運を遲からしめました。

明治九年二月の事、時の内務卿大久保利通氏が、米人「ライマン」氏をして全國の地質を調査せしめ、その七月油田調査の爲め信州の地質を調査し、それから越後に及ぼし、油井の所在は勿論、石油の露出し、瓦斯の噴出せる處は、一々綿密なる踏査をなし、地質測量圖を作りて、翌年一月内務卿に報告しました。

そこで、一時中止の姿となつて居た油田開鑿も、「ライマン」氏の報告に依りて企業家の確信を鞏固ならしめ、明治十九年頃から續々油田開鑿の新會社が起りました。それで或る鑛區から多量の石油が噴出し、一晝夜に一千樽を汲み取つた等の報導が傳はると共に、企業家の血を湧し相爭ふて新會社、新組合を起す事となり、明治三十年頃には、長岡市だけでも三百餘の會社組合の看板を掲けるやうになり、北越の地は始めて日本

に於ける石油産地であると云ふ事を知られたのであります。所が、米國の「スタンダート」會社は我が越後の石油事業に着目して、明治三十四年に會社の枝業たる「インタナショナル、オイル、コンパニー」を直江津に建て、一千萬圓の資本を卸して縣下の石油事業を併呑せんと試みたので、此れに對抗して寶田、日本の兩石油會社の如きは、共に增資して一千萬圓の大會社となり首尾よく之を壓倒して終ひました。一地方に一千萬圓の大會社が起つたのは、之れが矢であるそうです。

斯ふ云ふ狀態で、越後の石油事業に投資せられた資本額は、三千萬圓以上に達し、石油鑛區は十一億萬坪以上に及び、一昨年末の石油産出額は、實に百五十萬三千八百六十九石の多きに上り、我が重要産物の一として、優に全國石油需用額の三分の一を供給するやうになつた、之れが爲め、他の府縣に比し夙に富有を以て稱せらるゝ同縣下は、更に驚くべき富を增すことゝなつたのです。何とこれこそ不思議な進歩、不思議な幸福ではありませんか。

火の井戸

これは、他國にはあまり類がないことですから、越後の人が七不思議の一つに加へて誇つたのも無理のないのです。

火の井とは、一尺四方位に深く掘り不げたもので、南蒲原郡三條町在妙法寺村邊では何處の家にも此の井戸があります。井戸と云ふから水を汲む爲めかと思ふと然樣でない、火が湧くのです。又夜間農業をする爲めなぞには、竹筒を地中に突き差し、其の先に鐵の環を箍め、點火して光りを取りつゝ働きます。

そして、井戸の周圍には風避けをこしらえて置いて、強い風の

爲めに火が消えないやうに要意してあります。又火のいらない時には、大きな團扇のやうなものを以て、強く煽ぐと消えて終ふのである。又火が入用の時は其の井戸の上に一寸火を附ければ、直ぐと盛んに燃え出します。

是れは今日の所謂瓦斯泉(Gas Spring)と云つて、石油を産する地方では、何處と限らず噴出する可燃瓦斯であります。

抑も、火井の正體はどんなものであるかと云ふに、植物質若くは動物質が、地中又は水中に於て分解し、沼氣、渾發油又は石油の性質を持つて居る炭火水素と云ふものを生じたからである。

信濃の諏訪地方でも、燈火用又は煑沸用として、これを用ふるほど噴出したと申します。

外國で、此の瓦斯泉の最も有名なるは、露西亞國「カスピ」海の西岸なる「アフシエロン、バクー」附近、及び亞米利加合衆國の油田地

方、又支那でも雲南省地方で皆盛に燃料に供して居るさうです。

今の瓦斯燈は全く同理です、瓦斯會社で大仕掛で石炭を蒸して多量の石炭瓦斯を作り、是れを管で以て市中の家々に引き、ねぢの工合で火を附けるも消すも自在に仕組んであります。

今では是れを燈火用のみではなく、物を煑沸するために引いて置く家が多くあります。瓦斯泉は自然的で、是れは人工的、道理に異つたことはありません。

數年前東京の根岸あたりで、此の石油瓦斯が發生して、竹筒を地中に差込んで火を付けると燃えると云ふので、大騒ぎをやつた事が新聞などに出て居ましたが、それはもと石油庫のあつた跡で、多量の石油を附近の沼へこぼし、其れが地中に染み込んで瓦斯となりて發生したのだと云ふ話である。是等の事を考へれば、越後の火の井戸も少しも不思議とするに當りますまい。

現今、越後では石油事業に次いで、此の天然瓦斯事業が勃興せんとして居ります。今左に其概況を述べませう。

目下同地方で、天然瓦斯の盛んに噴出して居るのは、日本天然瓦斯會社の經營して居る、長岡郊外の鑿井であります。此の鑿井は一日能く二百四十萬立方呎を噴出して居て、そして其の噴出量は優に東京市今日の需用を充たして、餘りあると云ふ事であります。

斯の瓦斯は、現に日本瓦斯會社の專務取締役たる高野毅氏發見に係るものであつて、今其の噴出量の一小部分を長岡市に供給して居りますが、綽々として餘裕あるので、會社は更に進んで、其の燃力の强盛なのを利用し、製油機鑵の燃料に供給する計畫を立てつゝあります。それはかりではない、次いで第二第三の鑿井をなし、現在の鑿井と同一の噴出あるものならば、東京市にでも供給したいと云ふ意氣込で居るのです。

此の瓦斯の噴出は永久であるや否やは疑問ですが、若し永く無盡藏のものとすれば、石油に次げる、否或は石油に勝れる富源であるかも知れません。

八房梅

八房梅は八英梅とも書きます。どんな物かと云ふに、或る書物に北蒲原郡小島村梅護庵と云へる庭前に一株の梅あり、根蟠りて幹二丈に過ぎず、東西八間南北九間餘に茂る、柵を以て周圍を圍ふ、花八重にして淡紅なり、里人の傳に、往昔親鸞師當地化導の砌り佐五助と云へる民家に宿り、膳に供せし鹽梅の核を取り

後の世にしるしの爲に殘し置く

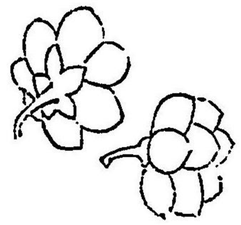
彌陀賴む身のたよりともがな

と、一首を詠じ、紀念に植置かれしものと云ふ。毎年數多の實を結ぶに、一花八子を有し、味鹹し、故に八英梅と稱し、其の名世に高し。

又此の邊農家の庭前に、同師の舊跡球數掛櫻と云ふあり、花房恰も球數に似たり。

其の梅の實は、大きさは大豆位で圖の如く中央に一顆、其の周圍に七顆並んで、都合八顆ありと云ふ。其れから、又花瓣も八重で、香が非常に高く、一里餘迄も香ふので、花の頃には見に來る人織るが如き有樣だそうです。其れで此の八房梅の實は、寺の坊さんが鹽漬にして置き、何時何人にも食べられるやうに、保存してあるそうですから、見ることも、味ふ事も隨意だと云ひます。

八房梅



是れは、成程珍らしい梅には相違ないですが、八房の梅は、植物の本には、坐論梅だの品字梅だのと書いてあつて、他の國にもあるのです。

現に兵庫縣養父郡高柳村の農家、福田太兵衛氏の庭前に、花も實も此れと同樣の梅が一株植ゑてあるそうですが、其の實は落ちるまで青いと云ふことです。

武藏國青梅町の金剛寺には、一株の梅があつて、其の梅の實が何時になつても青いと云ふ所から、町の名を青梅と附けた。そして是れに平將門が手植にしたと云ふ話を附會してありますが、餘り當てにならないのです。

一體、此の樣な風變りな樹木は、特種變生植物と見て置けば差

支へ無いので、恰も人間や動物に時々不具畸形の兒が生れると同じ譯です。其にも拘らず、親鸞上人云々の因緣をつけたのは、つまり上人の廣大な德を慕ふ崇拜心から起つた結果と思はれます。

三度栗

是れも同じく、蒲原郡の安田村孝順寺と云ふ寺にあるので、形は普通の芝栗と同じことであるが、珍らしくも是れは左圖の通り葉の先が二枚に分かれて居て、一年に三度も實を結ぶそうです。

今同寺の緣起によつて見ると、次のように書いてあります。

祖師上人承元二年の春、越後國へ下向有て、頸城郡國府と云所に、二年の滯留遊ばされ、夫より同國蒲原郡保田の鄕に、暫く化導の杖を止めさせられけり。

爰に嵯峨天皇の後胤、河原の左

三度栗

大臣源の融十二代の末孫、渡邊源吾綱より九代の子孫、渡邊播磨次郎源の競と云待あり、源三位頼政の家臣なりしが、治承四年、字治の戰に主從共に打死す。依て渡邊の妻子たよるかたなく、泣々越後の國へ落、保田の里に庵を結ぶ。されば建暦二年の春、先祖の忌日にあたり、追福を營む砌りへ、上人濟凡度生の衣を飜ひし通り給ふ。彼の老女、上人の尊容を拜し奉り、身の毛よだち崇く思ひ、はしり出でゝ上人に向ひ、御慈悲を以て貧家へ御入下されかしと賴みければ、上人寄特に思召して老女が家に入り、御教訓ありければ、老女宿緣到來いたし、歡喜の涙を流し、稱名を唱ひ喜也。幸に燒栗を捧げしに、上人是を受け給ふ。夫より上人上野が原へ行かせられ、袖より彼の燒栗を取出して、我が勸むる彌陀の本願、末世に繁昌致さば、此の所に根芽を生じ、一年に三度花咲き實るべし、葉は一葉の中に、

二葉に分れて繁茂せよと宣ふ。言下に栗忽ち根芽を生じて、今に繁榮す。詠歌に

一年に三度御法を通はせて
こゝろ保田に殘すやき栗

寄哉、其後老母が一子、出家して專念房と云。其頃孝順寺と寺號を蒙り、三度栗今に孝順寺の什物として殘り給ふ。云々

まあ、斯う云う風である。

是れは、外の栗に比べて甚だ珍らしいことには相違ないが、其の實が三度もなるのは、時により處によつて、一年に櫻や梅の花が二度咲くことなどがあり、一年に二度も三度も米穀の收穫があることなどゝ考へ合せたら、土地のせい氣候のせいなどもありませう、是れも前の八房の梅と同じやうな特種變生植物です。

然るに昔の人は是れにも同じく因緣を付けて、親鸞上人が燒

栗を地に植ゑた所、其れから芽が出て大きくなつたのだと言傳へて居るのです。

また其の葉の先きが二枚に分れて居ると不思議がつて居ますが、樹木の種類は異ふけれども、今左に二枚葉のある楓の話を參考に書きませう。

下總國、國府臺に眞間山弘法寺と云ふ、土地に名高き古刹がある。

其の寺の境内に、二葉紅葉と云ふ一株の楓樹があつて、一本の葉柄の先きから、葉が二枚向き合つて出來て居るのである。

口碑に因れば元此の寺は眞言宗であつたのを、後今日の日蓮宗に改めたので、其時から不思議にも此楓樹の葉が、二葉になつたと言傳へて居りますが、何れも共に一種の變生に過ぎんのです。

逆さ竹

是れも前の八房梅、及び三度栗と同樣の變生植物であります。

元は蒲原郡の鳥屋野に生へて居たが、今は枯れて終つて、其の枯れた幹は、新潟市西堀通五番町鳥羽院北山淨光寺に保存してあるから、其の寺に行けば見られます。

此の竹は、生きて居る時分、挿繪の通り枝も葉も皆逆向きになつて生えて居たのが不思議なので、七不思議の一に數へられてあります。是れも親鸞上人が、自ら杖いて居つた筇を地中に差したのに根が出來たことも、見眞大師の御杖の倒さ竹とも因緣が附けてあります。

武藏國三田村には、「逆さ篠」と云ふがあります。是れは、昔其の地の城主三田彈正と云ふものが、隣城の大名と合戰した時、矢種が盡きた爲め、背後の山から篠を切つて、矢に代へて敵方に射込んだのが、向ふの山に當り、其れに根が生じて逆さになつた儘、枝も葉も茂つたと云ふ口碑があります。

して見れば斯樣な竹の變種は、時々諸地方にあることでせう。其れに向つて親鸞上人だとか、矢の代用だとか例によつて因緣を附けて居るのであります。

因に本書の卷頭「ハ」の部に擧げてある七不思議の一說には、鳥屋埜の逆さ竹と、新潟淨光寺の逆さ竹と別種のものとして居ますが、彼れは多分別種のものではなくて、全く同一のものと認められます。

「眞言法要に」

越後國蒲原郡に一宇を建つ、淨光寺と號す。是れ勅願寺なり。彼の所に紫竹あり、昔より今に繁茂せり。佛閣の其の跡には、草一莖も生ぜず、諸人たふとみ奉る者なり。云々

と、書いてあるのは即ち今の鳥屋院淨光寺の事で、往昔は鳥屋埜に在つたのを、後世今の新潟の地に移したのであるさうです。

即身佛

是れは三島郡の野積村最上寺にあります。今謂ふ一種の「木

乃伊で」弘智法印と云ふ人の死體が其の儘乾し固つたものです。

其の因緣は斯うです。

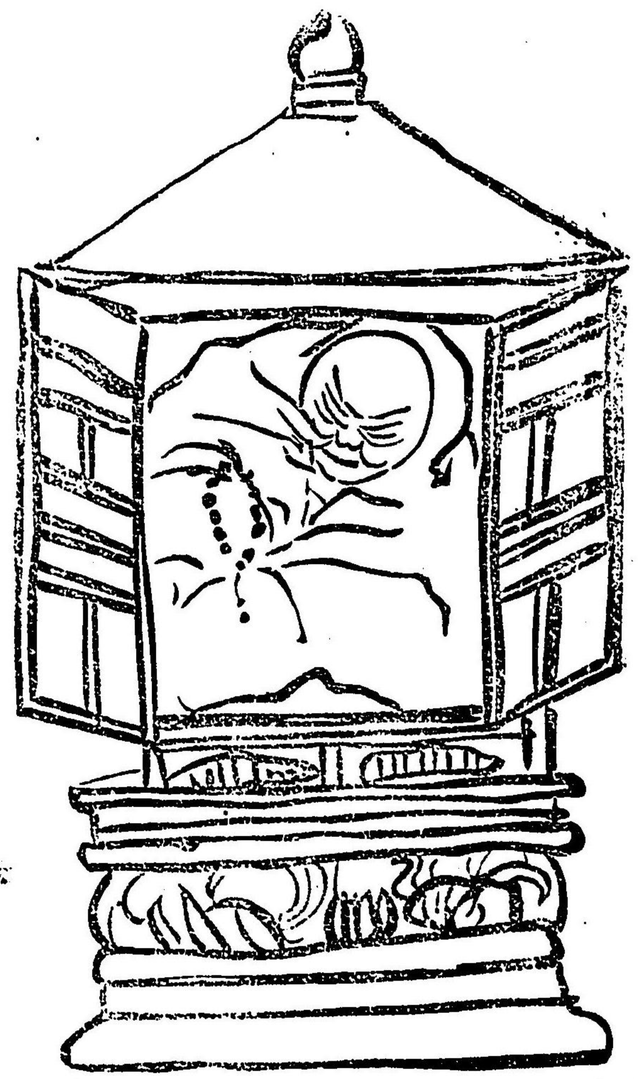
弘智法印は兒玉氏、下總國山桑村の人なり、高野に在りて密敎を學び、後生國に歸り大浦の蓮華寺に住し、行脚して越後に來り、三島郡野積村(里言)海雲山西生寺の東岩坂と云ふ所に錫を止めて草庵を結びしに、貞治二年癸卯十月二日、此の庵に寂せり。辭世として口碑に傳ふ歌に

「岩坂の主を誰れぞと人問はゞ
墨繪に書きし松風の音」

遺言なりこて死體を不埋、今天保九年を去ると四百七十七年に至りて枯骸生けるが如し、是れを越後二十四奇の一に數ふ。

と、北越雪譜と云ふ本に書いてあります。此の遺骸は、今も保存されてあつて見ることが出來ます。

是れは、所謂埃及あたりの「木乃伊」とは、大いに趣きを異にして居ります。即ち埃及あたりて行はれた「木乃伊」は、人工に因つて死骸を腐敗せしめぬやう保存したものであるが、是れは然樣で



はないのです。

恐らく食物の種類と、死體保存法其の他で自然斯う云ふ風に固まつたのでせう。其の最も委しい原因は、其れを解剖實驗した上でなければ分かりませんが、其の死體は神佛より大切にして、誰にも觸れることすら許されない位ですから、其の原因を明瞭に知ることは出來兼ねます。

因に言ふ「木乃伊」と云ふものは、世界最古の文明國、亞弗利加の埃及國で、最も盛んに行はれたもので、太古其の國では、人間が死んだ後、靈魂は一時人間の肉體を離れるが、又幾年か經つて、元の肉體に歸つて來るものであると云ふ考へを以て居たので、自然何うかして、此の身體を其のまゝ保存して置きたいと云ふ所から、考へついた死體保存法なのです。

其の方法は、今の文明國人も考へ及ばない程の巧妙を極めた

ものでで、三千年後の今日、其れを見る事が出來ます。現に、東京博物館には、二千五百年前の埃及人の完全な「木乃伊」が陳列してあります。

又同郡津川村の王泉寺と云ふにも、寛永年間の濠海上人と云ふ僧の枯死體があるさうです。

羽後の酒田にも、木食上人の同樣の遺體があると云ひます。

諺に「木乃伊取りが木乃伊になる」と云ふ語があります。此の理由は斯如です。印度、亞弗利加等の熱帶地方で、土人が茫々とした沙漠を歩みつゝある間に、熱さと飢渴とで斃死して終ふことがある。其の死體が固く乾し固まつて「木乃伊」となる。其れを取つて來て外人に賣ると、大金儲けになるので、土人が取りに出かけます。處が、取りに行つた土人も、亦炎天と飢渴の爲に「木乃伊」になつて終ふものが往々ある。つまり餘り强慾をすると、

自分の身を失ふやうになるのを笑つたのです。

燃る土

天智天皇の七年（今を去ること千二百四十年前）に、越の國燃る土燃る水を献ずと、日本書記に明記してある。

燃る土とは何そ、溫古の栞に

燃る土は、刈羽郡土合村地内一團結の田方、上土三尺下一面に奇土あり、里人は春の日、恰も割木の如く切出し、畔上に並べ日光に曝す、數日を經て干暴時は薪に代へ爐中煑炊の用に供す。火勢穩當なり。又三島郡竹森村地内の底にも同樣の土あり。

又一説には

燃る土は、三島郡柿崎村から出る。これは寛政の頃、石油が

浮いて流れる小溝の中に杭を打ち、草をからんで垣を作りて置く、すると、其處へ土交りの泥油が集る、其れをたくまと云ふ草で浚ひ取つて、薪の代りに燃すのである。

と云ふ風に書いてあるのもあります。

現今では、昔越後の人が燃ゆる土と謂つて怪しんだのは、今の石炭か泥炭の樣なものであると言つて居るものもありますが、前の二説に因つて見ると、全く石炭や泥炭ではなくて、何方も石油の染み込んだ土なのである。石油が染み込んだ土だから、燃ゆるのは當然なのです。是れ以上説明する必要はありますまい。

以上述べた所で、(への七不思議は既に之を說き了はつたが、是より以下は、他の七不思議、及び越後に唱へられて居る不思議の數々を、一纏めにして、研究を試みませう。

海鳴

海中にて鳴音遠くへは聞えて近くへは聞えず、鳴上り鳴下りにて晴雨をトすることが出來ると云ひます。

これは越後蒲原の海の鳴る音を謂ふのです。そを一つの不思議と立てた理由は、何處の海でも大浪の立つ時に音がするのは勿論のことで、近ければ高く遠ければ低く聞えるのが當然でせう。

然るに蒲原の海ばかりは、平穩な時にも音が聞えるからです。即ち靜なる夜など大浪の崩れる樣な音がするからです。

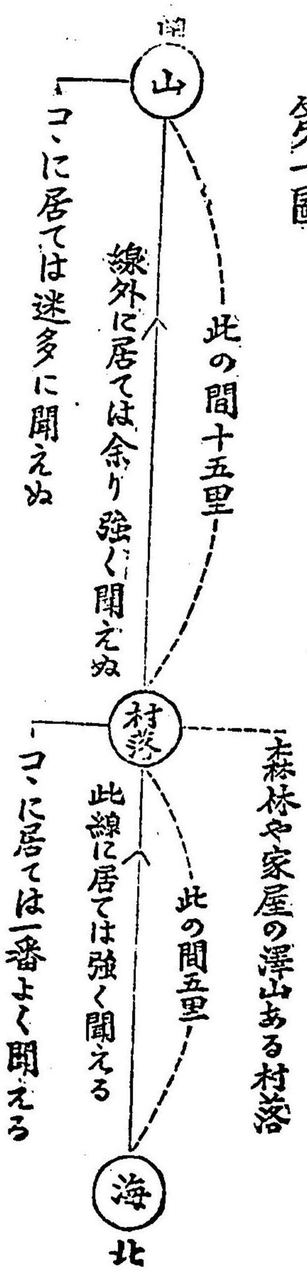
で、同地の人々につき段々調べて見ると、全國中越後ほど風の强い國はないからであるとか、北海殊に越佐の海峽は波が高いからであるとか、いや海には「ウネリ」(天氣靜穩の日往々海上に大なる波浪あり、又暴風雨の止みて尙波浪の高く岸を撲つことあり之を「ウネリ」と云ふ)と云ふものがある、其れが地形や天候などの關係に因り、山丘の間に反響して音を發するのであるとか、いろ〳〵であつて、未だ之れには一定した說はないそうですから、尙他に說があるかも知れんが、大體斯うです。

一音　海中に起つ波の音が風と和して聞えるのである。

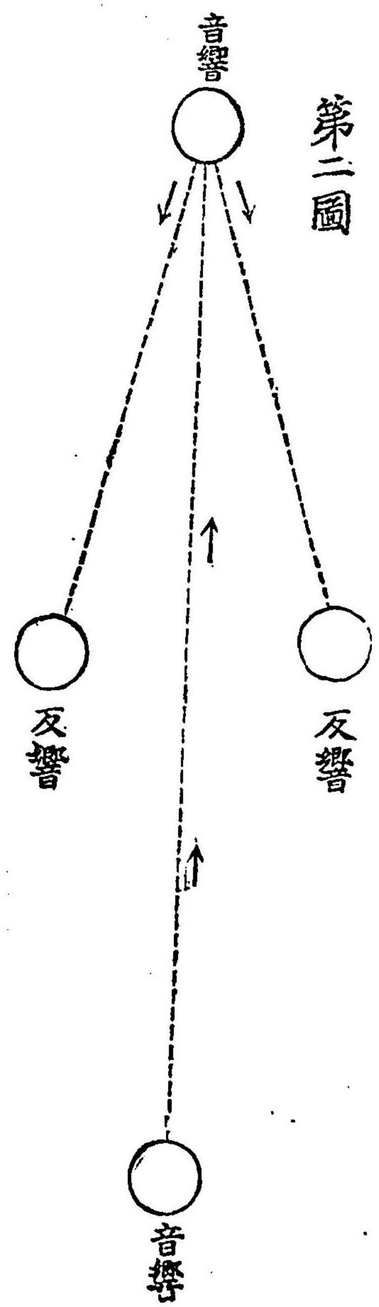
一近くに聞えず、遠くに聞ゆる原因、其音の反響である。

假令ば響が北より南へ行くとする、そうすると夫れが東や西に居る者には餘りよく聞えず、南に居る者には强く分かる。其の反響の點に居るもの、又は其の反響の通過する線內に居るものには、必ず明瞭に聞ゆる筈である。

第一圖



第二圖



反響は、必ず山や丘ばかりではなく、建物でも木でも何にでも反響する故に、森林や家屋などの最も多い村落などに居れば、一番よく聞ゆる譯である。（第一圖參照）

又其の反響であると思はるゝ證據には、其の音が却つて反對の方向に聞ゆる樣の事がある。（第二圖參照）

だが、反響作用であるとしても、十里二十里と遠く隔たるに隨つて、だん〳〵聞へなくなる。又其の反射の距離が、餘り近いと明らかに之れを聞取ることが出來ぬものであります。

一鳴上り鳴下り

以上に依りて、海鳴の事も、ほゞ判斷する事が出來ませう。但し、鳴上がると云ふ事は、音がだん〳〵西南（主に朝鮮南）の方へ行くことで、鳴下るとは、東北の方へ行く事を謂ふのです。

一晴雨を判斷する事

氣象觀測上の說に因れば、東北（北に）より吹く風は、大概雨を含んで來るが、西南（南に）の風では、滅多に雨が來ない。それで越後の人は、鳴上る時は雨となり、鳴下る時は晴天となると謂ふので、あろう。もつとも餘り鳴上過ぎて（西に）音が潰ふれる時は、また雨となるとの事であります。

土鳴

土鳴は、俗に（胴鳴）（或は塔鳴とも書く）と云ひます。蒲原の潟の鳴るのを名けたので、秋の空晴れたる日に多いそうです。沈みて鳴る其の音は凄じく大地に響くそうですが、是れも近くに聞えず、却つて遠くで聞える

この土鳴は、蒲原の新潟邊から、彌彥山あたりに聞ゆる者として、隨分古くから言傳へたものゝやうであるが、何分にも維新以

後一向聞えぬから、其の研究も出來兼ねて居るとのことである。併し、越後は全國第一に液體鑛物（石油）に富んでであるから、土鳴は或は此等の原因で、昔鳴つたのではあるまいか、又は越後に澤山出る、瓦斯の作用ではなかつたらうか、殊に、蒲原は彌彥山の火山脈を控へて居るから、多分此等の關係で、時々地下に鳴動を起したのではなからうかと思はれる。よく火山の噴火する際などには、其の地方で鳴動を聞くものであるが、此等は地文學上今日敢て異とするに足らんのであります。

又其の音の遠くに聞えて、近くに聞えんと云ふ理由は、大概海鳴と同一のものとしか思はれぬ。其れから、秋天氣の晴朗なる日に多く聞へると云ひますが、それは、餘程季節や天候にも關係を以て居るやうであるが、總て物理學上乾燥して居る空氣には、物に響きが強く、濕つて居る空氣には、餘り強く響かぬ。夏の空

氣は濕つて居る、春、イヤ春の空氣より秋の空氣は、一番よく乾燥して居る、それ故秋によく聞ゆると云ふのであらうと思はれる。

また胴鳴に附いて、左の如き傳說がある。

昔、阿部貞任の部下たりし黑鳥兵衛と云ふ者、蒲原郡黑鳥村に砦を搆へて雄視し居りしを、義家の兵に陷れられ、遂に身首を異にするに至りしが、胴は黑鳥の附近尾楯八幡宮の境內に埋められ、首は彌彥山に埋められたり。（首の所在分らずと云へり）素より剛の者なれば、殺されたれども全く死せず、胴は首を求め、首は胴に合はんとし、遠雷の如き號叫を發するなり。然れども、目的を達することと能はざるは、神が之れを押さへ居る故なり。云々

この胴鳴は前と同じく、多く秋冬の候に聞ゆるよし云傳へ、また尾楯八幡宮などの附近に於て、其の所が鳴ることは、聞えぬ者のよし云傳へて居ります。

猶、黑鳥兵衛と云ふ者の確かなる事實分らず、時代なども源平より新しと云ふ說もあり。されば、これも一つの附會說としか思はれません。

胴鳴の事も、此位說明したら、大概想像が出來ませう

神樂

中蒲原郡粟ケ嶽の東に御神樂嶽と云ふ深山あり、頂上へは峻嶮にて到り難し、此處で時として、俄かに神樂を奏する音が朧まで聞えて、樵夫等はよく夫れを聞くことがある。　頸城、魚沼、岩船郡邊の深山にも斯る所數ケ所あり、里人御神樂と云ふ。

山丘地方に在りては、往々山風及び谷風（夜間地面附近の大氣は地面熱輻射したるが爲、寒冷濃厚となり山側に沿ふて溪谷に落下す、之を山風といふ。又晝間山腹の空氣は熱せられて稀薄となり、割合に冷涼なる溪谷の大氣は之を補はんとして谷を昇り來る、之を谷風と云ふ）を生する事がある、俗に之を山に風の入ると稱し、山里などにては風

の吹くと覺えざるに、或は前の山に風吹き入りて凄じき音を立て、或は前の山は音もなきに、後の山颯々の音を立つることがあります、是れも其の類の一種で、天候や山の方位などに因り、風が山に當つて種々の響を成し、人々の耳に入つて神樂のやうふ聞ゆるのでなからうかと思はれる。

下野國、日光山の程近い所に古峰ヶ原と云ふ所がある。昔其の山奥の古峰山にも音樂を聞くことがあつて、世間では、夫れを天狗の所業だと云つて居ましたが、世の中に天狗などゝ云ふものが眞にあるべき筈のものではありません、その起因は斯うだのことです。

維新前迄は寒中になると、日光の行僧等が年々此の古峯山に籠つて行をしたものである、そして時に笙篳篥などの古樂を奏したことがあるのを、折柄東北地方の或る浪士が、路に迷つ

てこの山に蹈み入り、圖らずも山奥で嘲哢たる音樂の音が聞えたので、不思議に思ひ音する方へ尋ねて行つて見ると、遙か彼方の山上に異樣の服裝をしたものがあつて、頻りに音樂を奏でゝ居る。浪士は元よりこれが行僧とは知らう筈がないから、不思議な思をなし、これぞ世に言ふ天狗と云ふ者ならんと驚き畏れ、其の正體を見屆くる勇氣もなく、元來し方へ逃げ歸り、其れより愚かにも到る處に、吾れこそは古峯山の山奥に分け入り、天狗を見たりなどゝ、尾鰭をつけてさも誠しやかに吹聽し歩るいたのが、そも〳〵古峯原天狗存在說の根原であるとのことです。

然るに文明の今日、尙其の根原を知らぬ人、殊に東北邊の人たちは深く其れに迷信して居るものがありますが、天狗の傳說などゝ云ふものは皆人が想像して作つた話、或はまた、何か意外な事

があつた時、深く研究もせずに、天狗の所業と極めて終つたものに過ぎません。

白兎

山野に住居する兎の毛が雪が降ると白毛に變ずるのを越後人は甚だ不思議がつて居るが、是れは一種の保護色と謂ふものである。

保護色と云ふのは、凡ての生物が、自分の弱い點を隱す爲めに天から賜はつた特色であつて、敢て不思議とするに當たらんのです。即ち動物で謂ふならば、虎や豹などの毛皮の色が、其の土地の山林の色に酷似して居る事や、白雪皚々たる北極地方に白熊が住むことや、稻の中に居る蝗が他の鳥の眼を避ける爲めに、稻の葉の色をして居ることや、桑の木に接む尺蠖が、桑の枝に似て居る事や、植物で云ふならば、梅や柿などの青實が、葉の色と見分けがつかないで鳥の眼を避けるやうなのは、皆特に天から授つた保護色なのです。

先年、滿州方面で日本の軍隊が、すつかり「カーキ」色の軍服に改あたのは、彼色が向ふの風土の色そつくりで、遠くから見ると、敵に認められないからです。是れは、人造の保護色とでも云ふべきでせう。

矢の根石

越後では田や畑、山や野などから、たまに矢の根石と云ふものを掘り出すことがある。越後の人は、之を山の神の放した弓の矢の鏃だと言つて勿體がり、或は大切に秘藏したり、又は神に祀つたりなどして、崇め尊んで居るものがある。

矢の根石の出るのは、越後ばかりでなく、關東地方でも澤山に出る所が、いくらでもあるので、山の神の鏃でも何んでもないのです。

左に其の譯を述べて見ませう。

太古我國には、熊襲だの、土蜘蛛だの、又は「コロボックル」だの、蝦夷だのと云ふ土人が住んで居まして、重に關東や、東北の國々には、蕗の葉の下で貝を食つて居た「コロボックル」や、蝦夷と申して蝦のやうな鬚のある今の北海道の「アイヌ」族が澤山住んで居たのを、我々の祖先が之を漸々北へ〳〵と追ひまくり、とう〳〵今の北海道へ追ひ込めて終つたのであります。

夫れで矢の根石は、此の時代の唯一の武器として、戰ひにも獵にも使用された鏃であると云ふことは、歷史上明かな事實で、何にも其の樣に恐れるにも崇むるにも及ばんのであります。

上野の博物館や、帝國大學などには、太古鐵器は勿論、青銅器も

作られなかつた前に用ゐられた石劍、石斧、石槌、石臼など、石器時代の遺物が澤山收集されてあります。

又昨年開設された、東京博覽會の折には、其れは〳〵種々の珍らしい古代の石器が澤山に陳列されてありました。

鏃 鏃

一に「撫太刀」とも書く。西蒲原郡彌彥山と國上山の間、黑坂と云ふ所にて躓き倒るゝものは、必ず此の奇禍に逢ふ。其他國中何處となく、濕地或は、古川筋などを歩行し、突然腰下に傷を受く、其の痕の敢て痛まさるものなり。

「カマイタチ」に斬られたと云ふ理由は、空氣の變動によつて、空氣中に眞空、即はち全く空氣の無い所が出來、そして人間の體の或個所が、その眞空に觸れる時は、外部からの氣壓が無くなるので、

身體内部の氣壓が外面に逆り出やうとして、其れが爲めに皮膚が破れるのであります。

即ち「鎌鼬に斬られた」と云ふのは、空氣中に生した眞空の所爲であります。

又越後では、馬が足部等に負傷をなし、甚しく出血して斃れることがあります。同地ではこれを馬が「ダイバ」に掛けられたと云つて怖れて居ますが、此れも鎌鼬と同じく眞空の作用で、何も不思議とするに足らんのです。

庄内可成談に鎌鼬に就き斯云ふ面白い記事が載せてあります。

鎌鼬は、形のあるものではなく、人の五體に風が觸るる樣に覺えると、其所が剃刀で切つたやうな疵になりて、大變に血が出る、十中の五六は、塵土のある濕地にて、前のわづかな辻風に觸ると、此樣な疵が出來る。

鎌鼬は、鐵器を嫌ふものだから、刀などを帶んで居るものは禍にかゝらない、是は陸奥出羽にのみ有る云々」

鎌鼬と云ふは、恐らく鎌のやうな口をした鼬と云ふ事でせうが、誰も其の實體を見たものがない、其を殊更に魔物や鼬の所業のやうに思ふて非常に恐れて居るのが却つて不思議です。

繋ぎ櫪

南蒲原郡田上村、枝上野分、眞宗西養寺の境内に老樹の櫪一株あり、柵を以て周りを圍ふ。其の櫪の實にはどれにも糸で繋いたものゝやうに穴のあとがあるので土地の人は繋ぎ櫪と云つて不思議がつて居る。

里人の傳に

往昔、祖師上人當國化導の砌り、護摩山の城主深く上人の敎化

に歸依し、或時城中に招待あり、聞法の後、此の山の名産として繁げる干榧子を供せしに、上人は其の一粒を取り、紀念に前庭に植ゑられしに、忽ち根芽を生じ、枝葉青々として繁茂し、毎年幾多の實を結ぶに、いづれも繁ぎし皺痕ありしかは、城主制して伐ることなかれ、折ることなかれと榧を重んじけるが、建武年中沒落し、城趾空しく群獸の栖みかとなりしかども、只榧の靈木のみは安全に殘りて障りなかりければ、貴賤其の德を慕ひ、古を思ひて敬ひ重んじけり。

後遙の年月を經て、同寺の門徒等、遠近道俗の歩を運ぶ者の便を思ひて、之を田上の里に移し植ゑしに、枝葉益榮え、繁ぎ榧と稱して其名今に高しと云へり、是れも、珍らしいことは珍らしい榧に違いないが、矢張り前の八房梅や、三度栗と同じやうな變生植物と見て置けば宜いのです。

平嶋の川越名號（二名波切名號帆立名號）

西蒲原郡坂井輪村大字小新字鮫面（元平村）と云ふ所に、親鸞上人の親筆「川越名號」と唱へる六字の名號が安置されてある。

今名號堂主鈴木氏所藏の緣起につき、其由來を尋ねて見ると、左の如きことが書かれてある。

（前略）新十郎（堂主鈴木氏の祖）は深く聖人に歸依し奉り、明暮鳥屋野へ參詣いたし、聖人の御教化を蒙り、無二の信者となりけるが、其後聖人關東へ赴き給ふ砌、新十郎深く御別れを悲しみ川端まで御跡を慕ひ、尙御名殘りを惜み奉れば、聖人其志を察し給ひ、然らば形身を與ふべし、汝夫にて紙を開いて待つべしと、聖人川の彼方に在して、御筆を轉じ給ふに、不思議や川をへたてし白紙に六字の御名號現はれ給ふ、新十郎感激肝に銘じ、夫より子孫代々大切に安置し奉りける（後略）

下野國日光の向河原に含滿の淵と唱へる所がある、茲には弘法

の投筆と稱し、昔弘法大師が大谷川の此方に居て、彼方の岸に立てる岩面に、筆を投げつけて書いたと云ふことで、今で日光名跡の一つとして殘つて居ますが、無論附說に過ぎんのです。川越名號も、こんなことから思ひ付き、例の通り聖人の高德を尊崇の餘り、後人が其の樣に言ひ傳へたのでせう。

また、波切名號、帆立名號と云ふ謂はれは、

祖師聖人越後へ流罪の砌、五十嵐潟と申す所より船にて此の平島へ上陸し、(古は此邊まで海なりしと云ふ)夫より更に信濃川を渡りて鳥屋埜へ到らんとする時、一漁夫の川舟を艤せるを見そなはせ、川の向ひ迄渡し呉れよと仰せられしに、漁夫は御覽の如く今日は北風強く吹き荒び、波高くして渡ること叶ふべからずと申上ければ、聖人之を聞き給ひ、然らば余いま旗を作り與へん、此旗を舟に立てゝ渡らば如何なる風波も安體なりこて、軈て一枚

の白紙を取出し、六字の名號を書き給ひ、夫を舟の舳に立てゝ漕ぎ出たさせしに、不思議や、舟は八千八川の落口なる信濃川の大怒濤を、何の苦もなく、對岸の鳥屋埜へと乘つきることを得たりと云ふ。其時の漁夫は、則ち堂主鈴木氏の祖先にて新十郎と申す者なりしが、いかにも不思議の事に思ひ、其紙旗を卷きて苫屋の棟上に納め、媒煙に燻らせ置きしに、安政年中何國よりか聞き傳へけん、一人の旅僧訪ね來り、其の旗を拜せんことを乞はれしにより、之を取出し示せしかば、懇に拜禮を遂げられ、斯くては勿體なし、此れにて御裝置をなし呉れよと、金若干を差出し、留むるも聞かず、漂然として亦何處ともなく立去りたりと、其後此の名號度々盗難に遭ひしが、不思議にも其都度正夢の告ありて、不日にして復此の堂に歸るやうになりしかば、誰云ふとなく帆立名號、波切名號などゝ稱し尊崇深き

をますに至れり。云々

昔新田義貞が北條高時を鎌倉に攻めんとせし時、稻村ケ崎にて汐干の時刻を見計らひ、佩かせる太刀を海中に投込み、大いに將士の勇氣を鼓舞して海を渡つた事がありますが、これは聖人が機に臨み、漁夫の勇氣を勵ます爲に取られた即坐の方便か、或は漁夫が上人から書いてもらつた名號へ、後人が勿體を附けたのではなからうかと思ひます。

因に先年堂主鈴木氏は物故せられ、其後一家に不幸重り、あはれは深し、さすがに古き名家も茲に頽廢し、昨年十二月御名號堂（四五間）敷地諸共他人の手に渡り、只御名號だけは新潟の眞淨寺に預け保存してあるこの事ですが、其名號と云ふは、正しき聖人の御親筆であつて、今で媒はみたる地に薄く六字の名號を讀むことが出來、一見轉た六百年前の上人の德を偲ばしむ

との事であるが、どうか一日も早く再び元の鮫面に安置されるやうになり、越後に高き名所舊跡の名を全ふして聖人の高德を永く後世に傳へたいものです。

波題目

西蒲原郡角田濱村の海上に、南無妙法蓮華經の七字の題目が、往々波間に現々と顯るゝとのことである。

傳說に因れば

往昔、日蓮上人が佐渡へ流され、後ち赦免になつて將に此の角田の濱邊へ上陸せんとした時、其の海岸の大きな岩窟に棲める大蛇が見はれて、船中の人々を殘らず呑まうとした。其の時上人は、大蛇に向つて七字の題目を空中に認められたと、不思議にも大蛇は佛德に感じ、海中深く姿を沒して了つた

ので、一同無事に上陸することが出來た。そこで其の海邊に一寺を建立されたが、是れは角田濱村の妙法寺と云つて、今でも名高き古刹として殘つて居ます。所が不思議にもそれ以來、其の海上の波間に、時々七字の題目が現々と顯はるゝとの事である。

全く然樣とすれば、是れも不思議には相違ありませんが、よくよく其の原因を調べて見ると、其の海と云ふのは、角田山と云ふ山の裾根が、日本海へ突き出た下を謂ふので、其の邊の海岸は、一帶に峩々たる岩壁が、屏風のやうに水際に聳え立つて居る、其の岩避の表面に、高く七字の題目を刻み附けてあるが、それが波風の靜な日には、海上の波間に映つるのであるとのことですが斯樣な所は房總地方の海岸にもあるそうで、何にも不思議なことはないのです。

簑虫簑火

簑虫簑火と稱し、月なき暗き夜などに、舟夫や漁夫などの着て居る簑に火が燃えることがある。越後では、之れを其海や河に死んだものゝ亡魂が、人を誘ひに來たのだなどと謂つて怖がつゝ居る。

先年新潟の或る所から、一人の船夫が客を載せて、小船の艫を押しながら信濃川へ乘り出した。時は午前一時ごろの事であるから、天地は未だ眞暗だ。艪を進めて行くと、忽ち船夫の全身が丸で不動明王の如く、火を以て包まれて了つた。客はあやと驚いたけれども、船夫は左迄驚かない、豫て簑虫の事を知つて居り、斯う云ふ場合には、火を點せば簑虫は消え去るものであると云ふことを思ひ起し、直ちに「マッチ」を取出して點火すると、

不思議にも全身の蓑火は消えて了つたとの事である。

一体、新潟あたりの漁夫や船夫等は、斯様の經驗に富んで居ると見え、皆蓑虫蓑火と云ふことを云ふが、夫等の話の要點は、

第一　蓑火は秋期に多いこと

第二　身体を靜かにして居れば、自然に消え失せるものであること

第三　縱令全身に蓑虫が附いても、決して之れが爲に燒傷をする氣遣はなく、無論何の熱さも感じないこと

第四　自分には見えるが、他人には見えないこと

などであるが、斯様な例は、近江の琵琶湖にもあるさうで、これは亡魂火と唱へ、昔しから湖水で溺死したものゝ祟りだと云ひ傳へられて居る。時季は五月頃、淋雨濛々たる夜など、湖水を往來する船夫の蓑に點々として螢のやうな火が宿る。其の時靜か

に蓑を脱ぎ捨てゝ終へば、火は消えて了ふが、誤つて手おごで之を拂ひ落そうとしたが最期、五點六點に過ぎなかつた火は、千にも萬にも分散し、火勢猛烈になると云ふ。

又九州で、昔から不思議な火の一つに數へられて居る有名な不知火は、今では全く「ノクチール カ」と云ふ小さな虫が、多數相集つて發光するものだと云ふ事が分り、誰も不思議に思ふものはなくなりました。

一宵話と云ふ本の中に、

或年の六月二十九日、知多の浦より歸る船にて、海中に火の玉の群集せるを見たるが、其の火の玉の中には、鬼とも人とも附かないやうなものが澤山に居りたり。これ恐らくは、平家の亡魂ならんとの評判なりしも、何の緣もなき所へ、平家の亡魂が出づべき筈なければ、之れは矢張肥後の海にある、不知火と

同じものにてあらん云々、

と記してありますが、火の中に鬼とも人とも附かない樣な者が澤山に居たなどは、所謂疑心暗鬼を生ずると云ふものでせう。

狐火

蒲原邊では、日沒後、遠方を見渡すと、提灯の火が澤山に見える事があつて、それが點いたり消たり、遠くなつたり近くなつたり、又多くなつたり少くなつたりする。越後の人は、これを狐が嫁入する提灯の火だと謂つて、不思議がつて騷いて居る。そして、之れは狐の呼吸だとか、いや狐が人骨を含へて吐く息だとか、或は狐の有つて居る寶珠の玉が光るのだとか、若しくは狐が尾から光りを發するのだとか、隨分薄氣味の惡いやうなことを謂つて居る。

けれども、是は一二里の先きを通行する提灯の火であつて、狐の火でも何でもないことのことです。一体夜と云ふ時は、何うも人の眼が誤り易いもので、近いものを遠く見たり、遠いものを近く見たり、又一つのものが二つにも三つにもなつて見えたりすることがある、其証據には狐の火なども遠くからばかり見えて、其の邊の近くにて確かこと之を認たものがないのです。其理由は、

一、提灯の火が點いたり消えたりするのは、其提灯が物の蔭になつたり、出たりするからである。

一、其遠くなつたり、近くなつたりするやうに見えるのは、遠くを行くものと、近くを行くものがあるからである。

一、其多くなつたり少くなつたりするのは、通行する人が殖えたり減たりするからである。

全体蒲原郡邊の人は、狐や狸などが人間以上の、一種の魔力通力

を有つて居る、恐るべきものと迷信して居るものがありますので、ともすると、やれ狐に魔かされたの、狸が化けて出るのと、いつも大騒ぎして居ますが、彼等下等動物に、其んな事が出來る筈はなく、何れも取るに足らぬ附會の臆説で、狐の火なども、ホンの子供だましの愚説に過ぎんのです。　但し狐火は空氣中にある可燃物が化合作用によつて燃えたつのであるとの説もあります。

龍巻

夏秋のころ、佐渡沖の邊に、龍巻といふ者が起るのを見ますが、その有様は天に漲る黒雲の中から、恰度大きな蛇の尾を垂れて振り廻して居る様なものが幾條も見え、軈て間もなく強雨が盆を覆へした様に降つてくるので、越後では、之を龍が尾で水を巻上げて降らすのだと謂つて恐れて居るものがある。

龍巻は恐しい事は恐しいものに相違ないが、是は海上に於て「ツムジ」の起る時に生ずる現象であつて、其の下部は水でありますけれども、上に昇るに從ひ水は飛沫となり、さらに水蒸氣となり、遂に風に送られて雨となつて降つて來るもので、これも今日地文學上敢て怪しむべき者ではありません。

さらば「ツムジ」とは何物であるかと云ふに、是は陸上に起る過激なる旋風の事で、其の直經は甚だ狹く、一粁（三丈三尺餘）に超ゆる事は稀であつて、其の通過する間も十五乃至二十粁を出づる事は少くありますけれども、其の回轉は甚だ迅速であつて、中心は一時眞空を生じ、其の及ぼす所の災害は恐しい者で、或は樹を拔き家を倒すに至ります。　かの「サハヲ」などの大沙漠に起る旋風は、非常なものであつて、砂礫を中空に捲き上げて降下し、砂煙濛々咫尺を辨ぜず、忽にして山を谷となし、谷を山となすそうですが、

若し隊商のこれに遭ふ時は、避くるに途なく、駱駝の腹の下に身を潜めて辛ふじて之を避けるか、さなくば雨霰と降り來る砂礫の下に忽ち埋られて、終ふので、砂漠を渉る者は最も之を怖ます。

龍燈

海や河や、または池沼潟などから、龍燈と云ふものが上がると稱へ、そしてこれを其中に捿む主の所業だとか、又は龍神の點す燈明だとか云つて、餘り見た事もない癖に痛く怖ろしいものゝやうに言ひ傳へ語り合つて居る。

すべて水中には種々の發光する微虫や「バクテリア」の類を含んで居るものですから、暗き夜などに燐光を認むる如きは敢て不思議とすべきことでないのです。

抑も龍燈と云ふ事は、元支那から傳はつた說らしい。左に參

考として支那並に本邦に於ける龍燈に關した話を二三記して見ませう。

支那の月令廣義と云ふ本の中に

五岳遊盧山文珠臺に毎夜火光あり、空中より來り化して百とあり、亂飛する螢の如くにして臺前に落つ、是は佛燈と云ふ者なり。云々

と記して有る、又

支那の西湖の西聖觀の前にも、毎夕一個の燈火水上に浮び出づ、其色は青又は紅にして、施食亭の南より西陵橋の邊にまで行き、又元の處に歸り來る。雨や風の夜には其光色最も盛にして、月の明かなる夜には少しく薄く、殊に電雷の夜には光を其れと爭ふて極めて見事なり。云々

と記してありますが、是れは何れも發光細菌に浸されて居る蚊

が、雌雄陶汰をする際に起る現象だと、識者は説明をして居ます。

次に我國の例は「諸國里人談」の中に

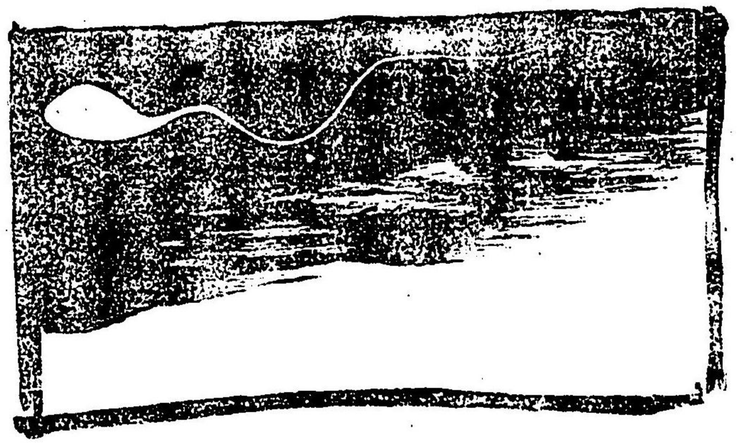
丹後國與謝郡天の橋立に、毎月十六日の夜半の頃、丑寅の沖合より龍燈出現して、文珠堂の方へ浮びつゝ寄り來る。其堂の前に一本の松樹あり、之を龍燈の松と名づく、殊に正五九月の十六日の夜には、空より一燈下る、之を天燈と云ふ。斯くして又一燈現はる、之を伊勢の御燈と云ふ。云々

と書いてあるの外、これに類した奇説は澤山でございますが、餘りばか〳〵しいから、これで止めて置きませう。

幽靈人魂

漠然と曇つた、雨の降りそうな物凄い晩に、よく墓地や火葬場の邊から焔々として青火が燃え上つたり、又空中を火の玉が

人魂の圖



長く尾を引いて飛んだりすることがある。

前者を幽靈の火だと云ひ、後者を死人の亡魂が宙宇に迷ふものだと、甚だしく恐れを抱いて居るものがある。

是れは其の見る人の觀察力の足らないのと、精神的作用とに依るものが多いのです。併しながら動物の骨の中には、例の燐素の化合物があります から、火葬場や墓地の中に永く埋まつて居る人骨が、化學的變化の結果、一種の燐化水素を發生し、之れが地の空所から出で空氣に觸れ、忽ち燃燒して光を放つことがあります。又大氣中

に存在する或る可燃瓦斯が燃ゆることもあります。其れらを認めて世間ではやれ人魂だとか幽靈だとか謂つて居るのです。どうして人が死んでから其のやうな事が出來るものか、自分で考へても大概分りませう。

諸國里人談に

攝津國高槻庄二階堂村に一種の怪火あり、其火の大いさ一尺ばかりにして、家の棟又は木の梢などに止まる。近寄つて之れを見れば目もあり鼻もあり、又口も耳もありて、恰も人の顏の如し。然れども別に人に危害を與へざるに因り、之を恐るゝものなし。云々

また本朝奇跡談に

伊勢國に惡路神の火と稱する惡火あり、雨のふる如き夜に多く、恰も提灯の如くに往來す。若し途中にて此火に行遭ふものは、必ず流行病にかゝりて煩ふと云ふ。然れども速かに大地に伏臥すれば、火は其の上を通りて病氣にかゝることなし。云々

未だ此の外に、奇談怪話の更に恐ろしい傳說は、昔からいくらもありますが、要するに多くは一種の迷信と、前に記した通り觀察力の足らないのや、精神的作用の怪物に過ぎないので、毫も怖るべきものではありません。

恙虫

信濃川や、阿賀野川邊の葭野の中から、恙蟲といふ眼にも見えぬ程の微小な虫が澤山湧いて、年々幾多の人を斃しますが、一度此の虫に刺されたものは、復た助かることが出來んので、越後の人は之を惡魔の所業かの樣に恐れて居る。

これは猛烈なる害毒を有つて居る、一種の虫であつて、年々此の虫の爲めに、あたら一命を失ふものが多くありますから、土地の人が之を魔神のやうに恐れて居るのも、決して無理もない事ですが、しかし惡魔の所業でも何でもない、此の樣な毒虫は外にもあるのです。即ち內地の蝮を始め、琉球に於けるハブ、印度地方に於ける毒蛇なども、同じく猛惡なる害毒を持つて居て、能く人を斃しますが、此れ等のものは眼にも見え、又治療法等も夫れ〳〵研究せられて居ますから、敢て不思議とはしませんが、此の恙虫は眼には勿論見えず、其の撲滅法や、治療法等も研究されて居ないから、此れを不思議として恐れて居るのですが、實に越後人の不幸は思ひ遣られます。

先年東京から醫學の博士や大家が、態々出張して研究に從事されたが、また其の撲滅法も發見せられず、治療法も工夫が附かんで、居ますが、何うか一日も早く此の害毒を除いてやりたいものです。

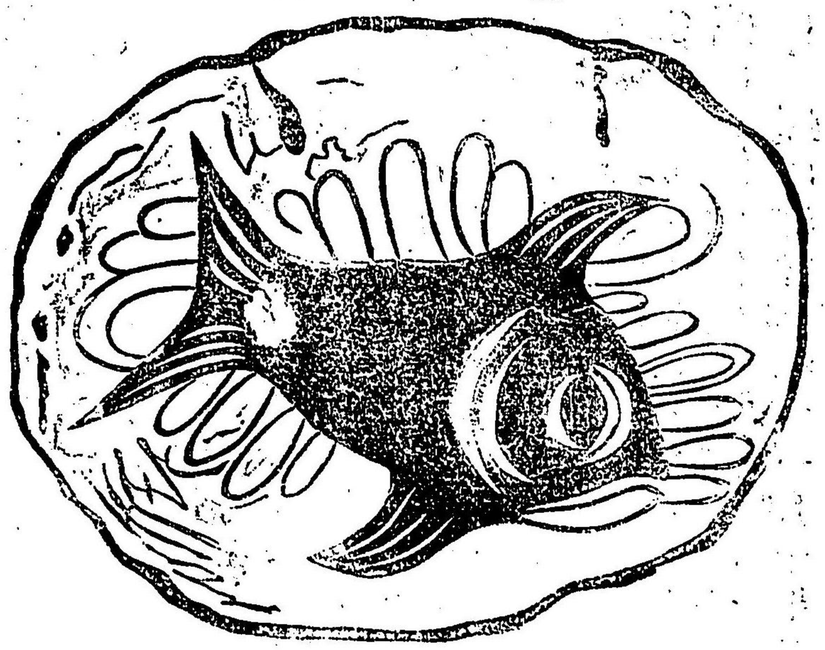
燒鮒

中蒲原郡曾野木村大字合子ケ作、鎭守社日枝神社（俗山王社）の境內に、元東西五間南北三間位の古池があつた（明治廿九年信濃川改作工事の際全字移轉し今は池もと川なれり）處が此の池に棲む鮒で、鱗が恰も燒いた樣な色をして居るのがあるので、土地の人は之を親鸞上人が燒鮒を放した所、それが生き返つたのだと謂つて居る。

同神社の緣起に曰く

往年親鸞聖人當國へ流罪の時、國府に二年鳥屋埜に三年御逗留あり、御敎化の砌、此山田に至せ給ひ、當社御信仰ありしとなり。然に建曆元年十一月十七日、御勅免ありければ、聖人鳥屋

鮒　燒



埜の里を御發足在しけるに、老若男女御別れを悲しみ此社まで御見送り參らせ、面々に手作の酒を携へ聖人へ献じければ、皆一つの器物に移し召上られけり。故に此所を合子ケ酒と號く、然るに中古合子ケ作と書傳へ、又或人燒たる鮒を御酒の肴に指上げれば、聖人燒鮒を御洗水に入れ給へば、不思議なる哉忽ち生かへり、今に至る迄此流の鮒燒たる形あり、故に燒

鮒の舊跡と申傳へり。

然るに寛政八辰の歳彌生、風の爲に御袈裟を懸け玉ひし榎の一枝折損じ、其の枝を挽わけ見に、不思議ある哉木口に聖人の御容、並に鮒の形（拝給のとき）正く顯しは、當社に深く宿願を籠玉ひしにより、御法も朝日の輝く如く、御繁昌なる事を歡喜の餘り、末世に其驗し殘さんとの御遺命に違はず、則御容をうつさせ給ふことならんと、故に空しく置かんよりは神前に奉納し今世に弘むるもの也。宗徒結縁の輩は山王の神驗、祖師聖人の御德尊信すべし。云々

と謂つて居ますが、明治廿九年信濃川改作工事の時、境内の榎を伐截した際、又々榎の木口に鮒の形態したものが顯はれ居り、池からも鱗の燒けたやうな大きな鮒が二尾出たので、土地の人々は尊崇して大騒ぎをしたとのことです。

よく〳〵聞いて見ると、該鮒の鱗が燒けたやうになつて居るのは、其池が湛水の古池で、水が他に流れ出ないので、其水色が赤錆て居る。それが鮒の鱗に染み込んで自然と燒け焦げたやうになつたので、一種の保護色とも見られませう。

又榎の切口に鮒の形のやうなものが出來たのは、木澁が木理に浸蝕だものであるこのことです。

して見れば是れも矢張上人の高德を尊崇の餘り、昔の人が附會した說とし か思はれません。

河童

夏季になると諸方の川々で、能く人が水泳ぎや魚捕りなどに出かけて溺死します。處が、其の死體の肛門が大きく開いて居ることがあるので、是れを河童に臀子玉を拔かれたと謂つて居る。そして一度河童に見込まれたら、どうしても遁るゝ事は出來んものだと言つて大層恐れて居る。

それで、河童とは何んなものかと聞いて見ると、或は蛙に見えて居たり或は河骨の葉などになつて居たり、色々に化けて居り、時としては少しの水溜りにも居ることがあるが、なか〳〵人間の眼などに止まらぬものだと云つて居ますが、其の實體は宛も童兒の樣であつて、黑き髮を被り、顏色は眞青で、頭上に皿の如きものを戴き居り、其の中に水を滿々と漂はせて居る中は、幾らでも力の出るものであるが、若し其の中の水を溢ぼされて終つたら最期、忽ち魔力通力を失つて終ひ、からもう意氣地のないものだと言つて居ます。併し、また誰も其の實體を見屆けたものはないそうですが、實際世の中にそんな怪しいものは無いのだから、見たものゝある筈はないのです。

また肛門が大きく開いて居るのは、人が水に溺れて死ぬ時には、先づ身體に痲痺を起し、後ち肛門括約筋（肛門を括約する筋肉にして、三層の輪狀をなす）と稱する部分が弛緩んでしまひ、其れで肛門が大きく開くので、此等は今日生理上少しも怪しむに足らんのです。

河童に捕られたと云ふは、人が水泳中、筋痙攣を起し、俄かに其の手足の指が曲つた限り利かなくなつたり（俗に「こぐらを」と云ふ）又は水勢の強い渦の中などに、巻き込まれて溺死した者なのです。

だが、偶には大きな蛇や龜などがあつて、水中に人を害することがあります。

今左に同地方に於ける其の實際の奇談を擧げて見ませう。

數年前西蒲原郡内野町在の農家の娘が、二人連で草刈に行き、或る川の岸邊に餘念なく鎌を磨いて居た、處が忽ち水中から何とも知れぬ、黑い丸太の樣なものが躍り出したかと思ふと、

一人の娘は川の中に引き込まれて了つたので、殘つた娘は喫驚し、氣も狂亂の體で其場を逃げ去り、此事を人々に告げたので、それと言つて多勢馳せつけて、川の中をば其處か此處かと尋ね回はり、漸々のことで探し出した時には、憐れや娘は既に此の世の人でなかつた、處がまた玆に不思議なのは、其の娘の腹が張り切れるやうに太く膨脹れて居て、其れがまた不思議にも丁度人の呼吸をする樣に動いて居るので、二度大騒ぎになり、新潟から醫師を呼んで見てもらふと、何かは知らぬ怪物が腹内に忍び込んで居るとの事で、劇藥を注射して斃さうとしたが、なか〳〵斃れぬ、數回注射を續けた結果、やう〳〵靜まつたので、之を解剖して見ると、あな怖ろし中には大きな蛇がとぐろを巻いて這入て居たとの事ですが、何んとあはれ悲慘な話ではありませんか。

次は今より二十年程前のことですが、

同く西蒲原郡の小石村に、身の丈高く筋骨逞ましき小石川と名乗る至つて鼠頁のある田舎相撲の關取があつた。或日川へ魚を捕に出懸け、水底深く潜り込んだまゝ、何時迄たつても出て來ない。處が其川には年老る大きな龜が棲んで居て、時々人を艱めるのであるから、弟は必定此れは龜の所業ならん、悪い奴が振舞かゐ、今日こそは許さじと、かねて用意の小刀を携へ、兄の入りたる處へ躍り込んだが、水中のことゝて中々見當らない、探り〳〵てゆく中、一番深い淵の底に大きな龜が最早綽切れた、兄の脇腹を確かと抱へて、沈めて居るのを見附けた、弟は憤然として兄の讐思ひ知れやと許りに、拳も通れと例の小刀を龜の横腹へ突込んで、流石年古る大龜を退治し、忽ち兄の讐を取つたことですが、大力無双の關相撲も水中の

ことゝて、大亀の力に敵し兼ねたものと見え、果敢なく一命を落したのを、土地の人は今でも惜んで居るとのことです。

魚岩

北蒲原郡大室村、村杉在に渡戸と云ふ所がある。其邊の地下を掘つて見ると、軟らかな岩石の表面に、魚の頭や骨や尾なぞの形が、生きて居た時、其儘のやうに表はれて居るのが、いくらも出るので、土地の人は之を魚岩と稱して不思議がり珍らしがつて居る。

是れは所謂一種の化石と見て宜いのです。即ち魚が岩石土砂の間に埋まつて終つて、化石したのです。

化石とは何ぞ、動物や植物が地貌の變化、其の他の關係に因り地中に埋沒して幾多の年月を經、化して石となつたもので、此の

様な魚の形の表はれて居る石や、又は貝や木の葉などの形の附いた岩石は、他の國からも續々出ますので、不思議でも何でもないのです。其の最も著しき例證は、我國では諸國の山中から澤山に出る石灰である。これは元太平洋の深さ二千尺もある海底に接む介類が化石したものであると云ふ事は、今日世に明らかなる事實であります。

それで、昔我國が二千尺も深かつた太平洋の底であつたのが、地殼の大變動に因つて凸起して陸地となつたと云ふ事が分り、又其時海底にあつた介殼が地中に埋沒して、今日諸國の山中に在る石灰に化したと云ふ事が分ります。又仙臺名取川の埋木なども其の一例です。

されば越後の魚岩なども、此等の事と考へ合せたら、決して不思議でないと云ふ事が充分に想像されませう。

左に參考として、世にも珍らしい鯉の化石した話を記して見ませう。

岡山縣勝田郡公文村大字阿蘇に沿ふて流るゝ吉野川に鯉淵と稱する所がある、一名を高瀬の井堰と稱し、阿蘇全部の灌漑に供せらるゝ井堰の底に使用せる敷石の中に鯉の化石があるとの事は、久しき前より誰れ言ふとなく噂し傳へられて居たが、之れを確に見たものがないのであつた。所が昨年の初秋の頃、同村の若者が相談し其の化石を探り出さんと、多勢水中に潜り入りて、たう〳〵其の化石を探し當て、陸上へ擔ぎ出したとの事である。今其の當時の有樣を聞くに、井堰の底、大岩石の狹間に、一尺餘りの眞鯉が二尾相對したまゝ、鱗鰭等原形を損せず、白玲瓏と化石し居り、世にも珍らしきものなればとて、此の珍化石は土地の産土神、杉神社に奉納し、其の境内に

保存してあるそうです。

鹽谷鹽水

越後の國栃尾附近に、山の谷間から鹽が出で、其の邊から流れ出る水は恰も海水のやうに鹽分を含んで居る處がある。土地の人は昔は其れを鹽谷鹽水と稱して、大層もない不思議なことゝして居た。

越後ばかりではない、昔の人は概して鹽は海にばかりあるもので、山などからは出べきものでないと信じ、之を不思議と思つて居たらしいが、今から見れば何にも不思議なことはないのです。抑鹽には岩鹽と云つて、外國では地下の鑛層から大きく結晶したものを多量に掘出し、之を碎いて食物其他種々の用に使つて居る所がいくらもあります。元來鹽の根本はどちらかと云へば、

陸地に有ると云つて宜いのです。今左に其の次第を述べて見ませう。

海水中に含有する鹽類の由來に二つあります。其の第一の由來は地球創造の初めから溶有して出來たもので、第二の由來は其の後幾百萬年地上を流れし水は、地中に含有する種々の鹽類を溶解して海に流れ出し、後、水は温度の爲めに水蒸氣となりて空中に昇り、後に鹽分のみを殘し行き、其れが絶間なく繰返されて、遂に今日の如く海の水には次第に鹽分が增加し、淡水に比して益々多量の鹽類を有するに至つたのであるそうです。

彼のシベリヤの死海などは、魚族が棲むことの出來ぬほど、鹽分を多く含んで居るので、其の名があるのだそうです。

又海水は岩鹽石膏等を沈澱することがあります。彼の獨乙、墺太利亞等から發掘する岩鹽は、皆往古海底に堆積して出來たも

のだそうですが、現に裏海の東岸なる「カラブガス」と云ふ所では食鹽の堆積しつゝある所があるそうです。

白清水

中頸城郡大和田村字今泉にあり。其の附近の泉は、悉く不純且つ濁勝ちなるにも拘らず、此の井のみは純清なること水晶の如く夏日行人の渇を醫する毎に賞讃せざるものなし。

傳曰

往昔弘法大師此地を通過し給ひし時、渇して或民家に入り、一椀の水を乞ひけるに、此家の媼心立て悪しきものにて、水の悪しきを口實として、骨惜みて與へざりき。

大師已むなく更に隣家に入りて水を乞はる、

此家の媼は、心樣甚殊勝なりければ、喜び迎へて言へるやう、「そ

は容易きお願なり、我家の水は水質は善からねど、御承知ならばいざ召上がれ。」とて、心よく大師に水を呈しければ、大師はいたく喜ばれ、「さらば媼よ、吾清水の出づべき井を穿ちやらん」と、己が杖先にて地を搔き給へば、不思議や透明玉の如き清水湧き出で、今日に至るも尚絶えず。云々

こは、里人が泉の成因を知ざるより出たる、附會の説であります。泉の水を檢べて見るに、概ね有機物と泥土を多少混交して居るものである。是は地層の罅烈から上部の汚水が滲入したるのか、又は湧出の途中、泥土及有機物を伴ひ來りしに過ません。其れで臼清水が、特に純清であると云ふのは、右の汚物を受けない地層に穿たれたからです。

新不思議

茲に越後新不思議と標題を置いて、特に紹介したい事がある。

去ぬる明治三十七年五月七日の事、村上を距ること約半道、瀬浪町大字松山と云ふ處で、石油の試掘を行つた際、地下二百間程も掘り下げた頃に、俄然十間餘りも高く熱湯を噴き上げた、場所は小山の中腹であつたから、瀧をなして流れ落ち、下に池を生ずる壯觀、人目を驚かした。爾來石油の試掘は立消えとなつて、全く一の新溫泉場を現出し、湯元九軒、別莊が建ち、料理屋が出來、新潟から陸續として、浴客が詰めかけると云ふ勢で、寂寥たる海邊の松林が、忽ちにして熱鬧の境と變つて了つた。實に稀代の珍事だ、斯う云ふ風に絶えず熱湯を吹き上げるなどゝ云ふことは、日本はおろか、世界にも例なからうと、越後人は例のお國自慢で居るとの事ですが、文明の今日だけに、弘法大師や、親鸞上人などを引合に出さなくとも濟むやうになつたのは、大いに喜ぶべきこ

とである。

越後傳說

四十七不思議解 終

明治四十一年五月二十日印刷
明治四十一年五月廿四日發行

越後傳說四十七不思議
定價金貳拾五錢

東京市小石川區怨籠町四十八番地
編輯兼發行者　中原敬藏
東京市神田區錦町二丁目六番地
印刷者　杉田鑛藏
東京市神田區錦町二丁目六番地
印刷所　日進堂
東京市本郷區元富士町二番地
發行所　磊磊堂
【電話下谷一三六九番】

不許複製

大販賣所　東京市神田區　東京堂
越後長岡　目黑書店　縣下各地書林

23

92
896

92
396

027326-000-0

92-396

越後伝説　四十七不思議解

中原　敬蔵／編

M41

ADJ-0079